

園長だより NO107

あっという間に12月になりました。街中もクリスマスのイルミネーションでにぎやかになり、大人も子どももなぜかワクワクするこの時期です。年の瀬ということもあり、仕事にも精を出す時期、寒さの到来と相交えながらも健康には十分気をつけて下さい。

「主体性を考える。」

先週、ある研究会で主体性についての講義を聴きました。こどもの主体性について語られていました。帰りの道中、満員電車で揺られながら、頭を巡らせいろいろと考えました。

園長だよりでも度々、主体的とか主体性などと言う言葉は度々、取り上げていますが観念的な思考でいつも考えていたんだらうと反省しました。「主体性」とは自ら考え判断したり、自ら責任を持って行動する態度や様子のことを指しています。一見、「自ら」という言葉から個々、その個人の知識や技術が向上さえすればいいものと感じてしまう。

幼児期における主体性の育みをその知識や技術の習得に置き換えてしまう方もいる。早期教育に力を注いだり、「〇〇がしたい」というので子どもの主体性を尊重して「〇〇を習い始めました」ということもあります。

では保育園ではどうだろうか？ 個々の能力獲得だけに力を注いでいるのではありません。個々を尊重しながら、仲間、保育者など関わる人とつながることで主体的な思いや行

動(態度)が表れてくる。様々な活動に挑戦したり、課題や問題を解決するため仲間と共に取り組んだりする。その中でしっかりと

「僕、私」が存在しその子の主体性が発揮されていく、大きくなるにつれて仲間との生活を楽しむことが色濃くなっていく、なかよしの子ども同士ならば、いろいろな遊び、新しい体験、活動に挑めることも多くなっていきます。

「やりたいな」「やってみたいな」という個々の思いが他者との関わり(特に仲良しの仲間)で後押しされ、取り組んでみようとする態度が表れてきます。経験から一人よりも二人二人よりも三人と遊びの楽しさを追求するとその輪も大きくなっていくものです。

仲良し数人で始まった鬼ごっこも次第に輪が広がりクラス全員の遊びになることもあります。ルールを破る子がでたり、みんながわかるようにルールを変更したり、問題が起こるたびに子どもなりに話し合い、解決し遊びを再開する。そんな営みが循環されていきます。個々においても「あれこれ」と考える。仲間とも「どうしよう、こうしよう」と考える。大人に言われることなく自分たちのこととして考えている。こんな姿(様子)にこそ、子ども(子ども達)の主体性を感じています。冒頭で記した主体性の一文「自ら責任を持って行動する」ということが遊びの中でみられている。仲間と共に遊びを楽しむ、より楽しむために考えていく、すぐさま考えたことを遊びに反映していく、「遊びの中でしっかりと

子ども達は責任をはたしている」と感じ、微笑ましくなるのです。こども(子ども達)の主体的な活動を一例とりあげ考えてみます。

5歳児の活動から ももたろう🍑

劇の中で考え、行動する。

来週、5歳児は劇の会があります。慣れ親しんだお話の中から遊びを通じて自分たちが演じていく題材を決めて取り組んでいます。ここでもこどもの主体性を大切にすることを重んじています。大人の考えたことを教え込むことはしません。できるだけ子ども達で考えること、行動にうつしていただくことを大切にしています。

お話を基に遊んでいることから次第に劇を形づけていく内容に変化していきます。あそびでのやりとりから場面ごと、役毎に考えていくことが出てきます。桃の流れるシーンは？ 桃たろうは桃からどう生まれてくる？ きびだんごはどう作る 剣はどうする？ 数えたらきりがなくらい 考え、思考する。実際につくる、演じる、又考える、演じるの繰り返しです。

鬼ヶ島へいくシーン 船に乗っていきいたいという。段ボールで作った船を持ち歩いては船ではないという。園庭にあるような船がいいという、知恵を出しあうがさすがに子どもだけでは実現できないこともあり大人も手伝う。車輪がついた船の土台ができ、劇をする。

たくさん乗っていると動かない。どうしよう 後ろから押してみるうごかない、考える子ども達

「車輪を大きいのにしてくれ」
※園庭の船を参考にして
「やったー うごいた 動いた」
「でも 押しては 不自然」
「では どうしたらいいだろうか？」

みんなでかんがえる。様々な生活体験から子どもなりの発想がでてくる。考えたことは実行あるのみで。鬼ヶ島までロープを渡して、船に乗った子ども達がロープをたぐい鬼ヶ島へ行くということになる。本物の船ならオールで漕ぐことが出てくるのだろうがアスレチック遊具にある池の中で船をロープでたぐい、岸まで行く経験などが妙案に結びついたようである。

主体性という個々に目を向けがちであるが仲間と共に活動することで発揮できる場面は多くある。それぞれが同じ方向に向かい、その過程で立ち止まり、ぶつかり合いながらもそれぞれを尊重し、つながりあい活動する。

劇活動では失敗も体験する。その都度、考え取り組む、また失敗でも、また考え、行動するそんな雰囲気の中で失敗は妙案を生むことを学習する。みんなが興味を示したことを子ども達が主役になりとことんやらせてあげることが おおぞら流の主体性を育むポイントなのかもしれません。

(おおぞら保育園 園長 廣部信隆)



2024.12.3

